



放課後 ¥ 助交際

-SEX AFTER SCHOOL-

サークル
ぺんぎんとーる

サークル
ペンぎんどーる

放課後 ¥ 助交際

-SEX AFTER SCHOOL-

俺は○校△年生。

つい数分前、

生活指導のオッサン牧田が俺の髪形を注意してきた。

こんなの難癖にしか見えない。点数稼ぎなのは見え見えだ。

このご時世だつてのに殴りやがつて。

指導だとかただの言い訳で、

自分のストレスを発散してるだけじゃねえの？

そんな怒りをぶつける先もなく、俺は澄んだ秋空を見つめていた。

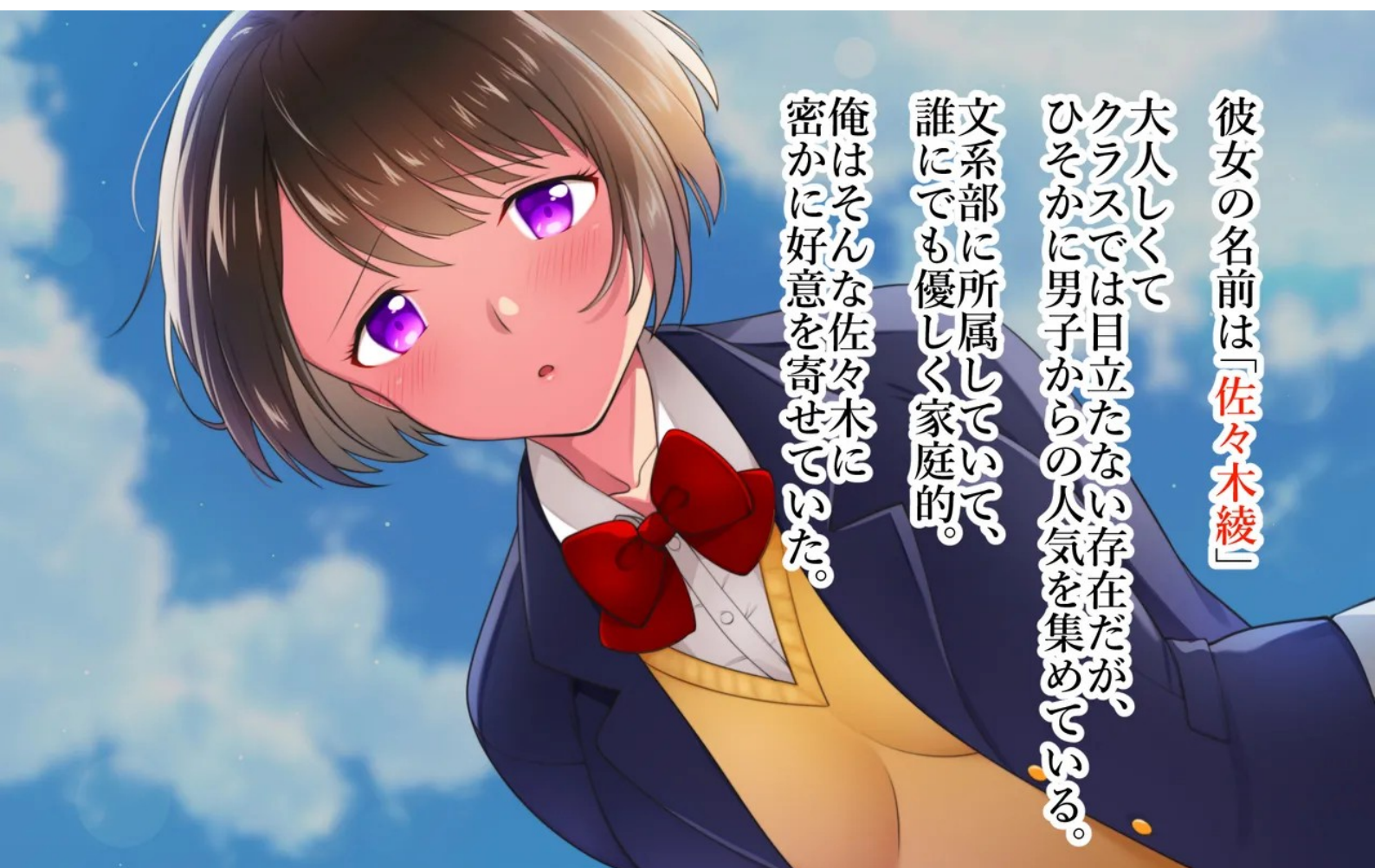


…叱られちゃったね
大丈夫？

い！

彼女の名前は「**佐々木綾**」

大人しくて
クラスでは目立たない存在だが、
ひそかに男子からの人気を集めている。
文系部に所属していて、
誰にでも優しく家庭的。
俺はそんな佐々木に
密かに好意を寄せていた。





これ使って

スミ

ぐっ

殴られた場所をさすって
顔をしかめていると、
佐々木が慰めてくれた。

優しい笑顔で
濡れたハンカチを差し出してくれる。

天使だ。
天使がここにいる。



—こんな噂が立った。

『佐々木が援交をしている』

信じられなかった。

あんなに優しくして
女の子らしい佐々木が
援交をしているはずなんてない。

思い切って本人を呼び出してみた。

放課後の教室には誰もいない。
これなら佐々木も
正直に教えてくれるはず。



俺の質問を受けて、佐々木が俯く。

いつもの大人しい雰囲気じゃなく、今は少し悲しんでいるような、そんな雰囲気。

『違う、そんなことはしてないよ』

『何かの間違い』

『そんな噂、何かの間違いだよ』

そう言つてほしかった。
失礼なこと言わないでつて
怒られたかった。
でも。





佐々木が小さい唇を動かして
そう言った。

なんで、どうして。
佐々木がどうしてそんなことを。

なんでも
家庭の事情でお金が必要らしい。

決めた。俺もバイトする。

佐々木が
そんなことしなくていいように、
俺が金を稼いで
佐々木に渡せばいいんだ。



それから、俺は必死にバイトをした。

部活にも委員会にも
入つてない俺は、
時間だけは腐るほどある。

飲食、工事現場、清掃、レジ打ち。

すぐに働けて時給が良い
バイトならなんでもやった。

稼いだ金を渡すため、
放課後の教室に佐々木を呼び出した。



お金だけ
受け取るわけには
いかないよ
私も何かお返しをしないと…



でも私：
君にお返しできるものなんてない
すごいお料理もつくれないし
特別なものもない：

だから……
これはどうかな？

グ
ッ

そう言っで、
佐々木がスカートをたくしあげる。

やめろ、そんなつもりじゃない。

そう言っでも佐々木はやめない。

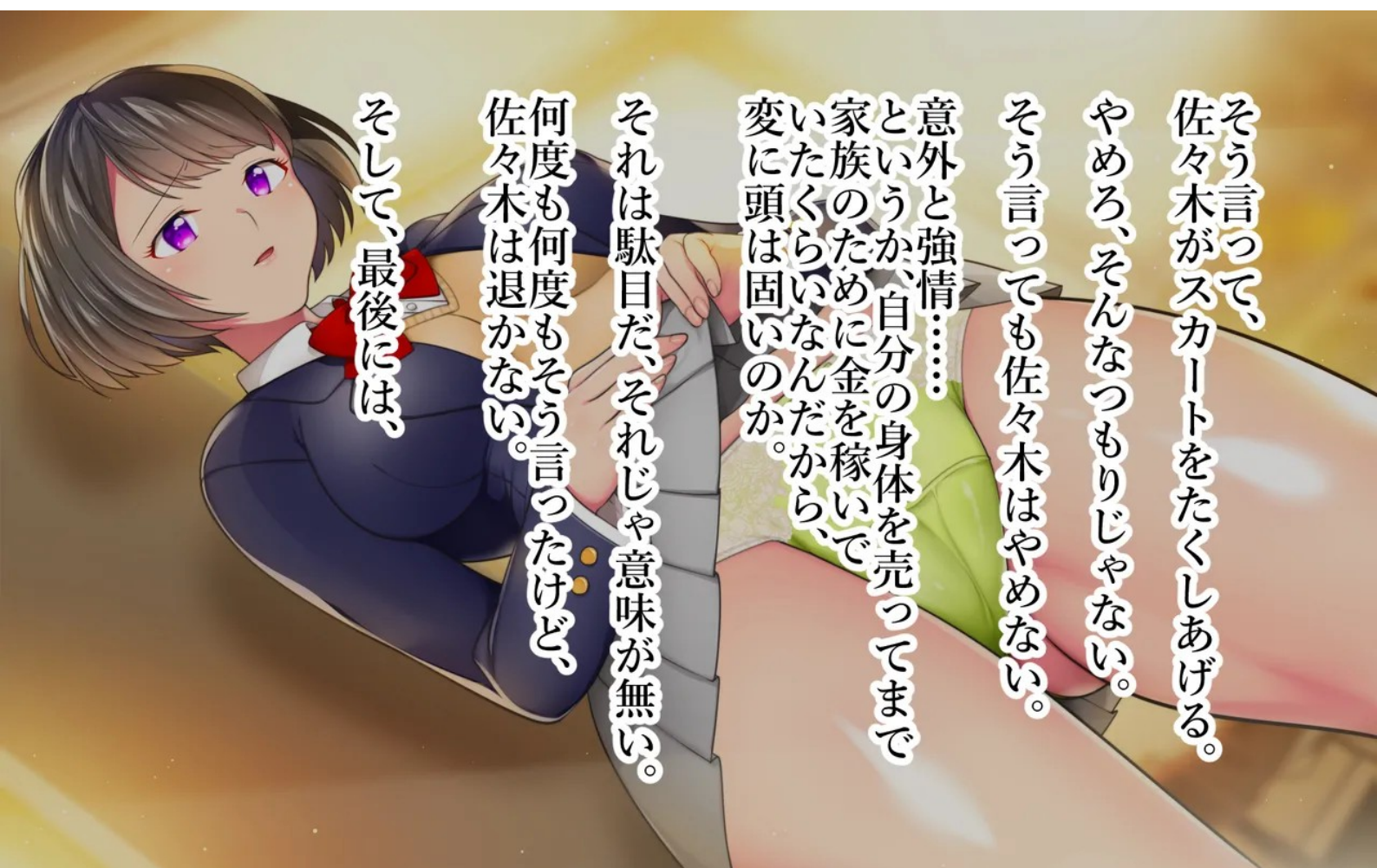
意外と強情……

というか、自分の身体を売っでまで
家族のために金を稼いで
いたくらいなんだから、
変に頭は固いのか。

それは駄目だ、それじゃ意味が無い。

何度も何度もそう言っただけど、
佐々木は退かない。

そして、最後には、





お金にお返しできるの
これしかないから...

.....私じゃ嫌?

それを言われて、
俺の我慢は限界を迎えた。

佐々木との初めてのキス。

心臓がバクバクして
仕方ない俺とは違い、

佐々木は慣れていた。



わあ...

すごい...もうこんなになってる

私の下着
そんなに興奮したの？

そ、そっか

ふふ、ちよつと嬉しいかも
頑張るね

ふふ



佐々木が俺のチンコを舐めてる。
あの可愛い口をゆがめて、
俺のチ●コを頑張つて頬張つてる。
こんなの興奮しないわけ無い。





…あ、あの
そんなに見られると
少し恥ずかしいかも

か、可愛くないよ
変な顔してるし、
こんなことしてるんだし…

ちゅっ

んあ

んあ

ん

ん

ん

ん



ん

...どう?

ちゃんと気持ち良い?
どこが良いとかあったら、

ちゃんと教えてね

お金の分、精一杯頑張るから

000

あ、ちよつと動いた
ここが気持ち良いの?

裏側の、窪んだところ...

はぁ

んぢゅ

ん

我慢しないでいいから
いっぱい気持ちよくなってね...

わっ

ん

ん

ん

…な、慣れてる？

うん…
初めはわかんなかったんだけど、
何回かしてるうちに
コツがわかってきたんだ

…ごめん、嫌だよ
もっと普通のコと
こういうことしたいよね

あはは…
でも、私が出来のってこれくらいだから
ちよつとだけ、我慢してくれると嬉しいな

その代わり、
いっぱいしてあげるから…

く
ちゅ…

oo



腰が動いちゃう？
少し刺激が強すぎたかな…
お汁もいっぱい溢れてきちゃったね

キレイにしてあげるから
私の口にたくさん出してね…

くちゅ

はぁっ
んっ

いゅる

んっ

んっ

ぐっ

んっ



ピクピク…してきたよ？
出そうなの？
我慢しなくていいからね

ん

ん

じゅぽ

ぐぽ

ん

ん

ぐちゅ

ゼン
ビュッ



…ゴクッ

…うん、大丈夫
ちよつと多くてびっくりしちゃった

それに…濃いんだもん
でも…まだ大きいまんまだね

まだ、シ足りない？

だよね…うん、わかるよ
じゃあ、もう少ししよっか？

にニッ
気にしなくていいよ
まだ料金のうちだから

ジュッ

ジュッ





……あ、あの

ぷりんっ

見すぎじゃない、かな？

もじっ

もじ

わ、悪い。可愛くてつい…。

佐々木のお尻。

今までちゃんと見てなかったけど、まん丸くてむっちりした可愛いお尻。パンツがぴたつと張り付いててめっちゃくちゃエロい。



お尻が可愛いなんて
意味わかんないよ

ふふ…初めて言われた

えっと、好きにしていいいんだよ？

…でも
痛いのかは遠慮してもらえると助かるな

あ…あと
お尻でするのもちよつと…かな

そういう行為が
あるのは知ってるけど
さすがに…ね

ポッ

も

そんなこと頼むわけない？

そうだよね…でも
そういうのが好きな男の人もあるでしょ？

いるとは思うけど、俺はしない？
私がイヤなら猶更…か

ふふ…君は優しいんだね…

あ…
少し待ってね
急に入れると痛いから、
まずはこうするの

ん…

フムフム



はい、これで大丈夫
なるべくゆっくり入れてね...

ぴん

くちゅっ

アッ

ズッ

佐々木が自分のツバをまんこに垂らす。

その大胆な行動に
チンコがさつきよりガチガチになる。

俺はヌルヌルになった綺麗な割れ目に
ゆつくりと慎重に挿入していく。







ふふ、ならよかった
好きに動いていいけど
出すときは外に出してね

言われた通り、最初はゆっくりと動く。
でも：どうしても気持ちよくて、
勝手に腰が動いてしまう。

文句なしに気持ち良い。

でも、なんだか俺だけ
気持ちよくなってるみたいだ。

佐々木はさつきから冷静と言うか、
いつものままつて言うか、

なんだか寂しいな。



あはは…
じゃあ、演技でもしよっか？
あんまり上手くできるか
わかんないけど…

ぱ
ちゅん

ちゅん

ぱ
ちゅん

ぱ
ちゅん

それもそれで悲しい？
でしょ？だから私のことは気にしないで
好きにしていーいから…

ん

ん

あ











...っほあ

...どう？気持ちよかった？
ちゃんと外に出せて...偉いね

はあ...はあ...

ん

はあ
はあ...

あわ...♡

ん

ん

シロ...♡

制服？
うーん、すぐに拭けば
大丈夫だと思うから気にしないで

私のためにまたバイトするの？
：気持ち嬉しいけど……

無理はしないでね
私のために時間もお金も
使っちゃもったいないよ……

う……

え



佐々木がなんと言おうと、
俺はまたバイトをする。
佐々木のために働く。

もったいないなんて、そんなことない。
自分がそうしたくてしてることだから。

それより、
はやく掃除したほうがいいな。
制服に染みがついたら大変だし、
万が一、誰か来たらマズい。





掃除…そうだね

これ、出したのキミなんだけどね…ふふ

フッ

フッ

それから
俺と佐々木の秘密の関係が始まった。

俺は空いた時間を見つけては
バイトしてお金を稼いで
それを全部佐々木に渡した。

その代わりにエロいことをするのは
後ろめたい気持ちもあったけど……
正直、断る気はあんまりしない。

理由はどうあれ、
好きな女の子とできるのは嬉しいから。



ほらほら
はやくしないと
休み時間終わっちゃうよ？

サッ
サッ
♡

アッ♡♡

佐々木に二回目の金を
渡した日の昼休み。

放課後にはバイトがあると伝えらる、
佐々木は昼食も食べずに
人の目を盗みつつ、
トイレの個室へと俺を引き入れた。





あんまり時間ないから
今のうちにしとこ?
ね?

だってモミ、
この後すぐバイトでしょ?

にゅ

ぐ

ム



手、冷たくない？
大丈夫？

フフ、
そっか、良かった

これ…気持ち良い？
トロトロしたの出てるよ



キミの反応がわかりやすいんだよ
ほら、こことか感じるでしょ？

ふふ…敏感なんだね

だめだめ
声出しちゃダメだよ？
誰か来たら大変



あ、
んっ

…どう？
そろそろ出そう？

ほら、トロトロがたくさん出てるよ

私の手の中で
おちんちんがビクビクして…

んっ

ビクッ

あ、んっ

は、んっ

とっちゅ

とっちゅ

とっちゅ

んっ





ね、アルバイト大変じゃない？
毎日してるよね…無理はしないでね？

それと、私にしてほしいことがあれば言って
痛いこと以外なら頑張るから

っっ

だって私、
これくらいしか返せるものがないもん
だから気にしないで…ね？



私の方も無理しないでって？
ふふ、ありがと…

あ…でもね、
お、お尻はやっぱりダメだよ？

キミ、最近お尻がお気に入りだもんね
隙があればすぐ触ってくるし…

私のお尻が気持ちいいからって…

むう…
それ、私のお尻がおっきいってこと？

…でも、お尻でエッチするのはダメだよ？
その…恥ずかしいし、
そういうこととする場所じゃないんだから



そんなに念を押さなくても
佐々木が嫌がることはしないつもりだ。
好きな女の子に嫌われたくないし。

：しかし、
嫌がられると気になってしまう
気持ちも少なからずあった。





ええと…
こう、でいいのかな？

ぐんぐん

あゝ

次の日。
体育の授業が終わってすぐ、俺たちは
使われていないロッカールームに
向かった。

誘ってきたのは、
またしても佐々木のほうだった。

佐々木は校内の人気の少ない場所に
妙に詳しかった。





もう：男子って本当に
おっぱい好きだよね

うん
教室にいても
チラチラみられることあるもん

ふふっ

あーっ

あーっ



あ

でも…
なんでもしてあげるとは言ったけど

おっぱいで挟んでほしい、なんて
言われるとは思ってなかったかな？

っ

えへへ

オニオン

ぐにゅ

ううん、いいよ
初めてだから上手くできるかは
わからないけど…よいしょ…

ちゅちゅ



えっと、どう？
気持ち良い？ちゃんとできてる？

こうやって上下に
動かしてあげるのが良いの？

ふふ、気持ちよさそうな顔…

なんか変な感じ
おっぱいの間からお●ん●んが見えてる

んっ

やっ
やっ

たっ
たっ

んっ



んっ…

気持ちよくなってきた？
エッチな匂いが濃くなってきたよ？

たーぽん

たーぽん

たーぽん

ぽちゅん

ん

たーぽん

たーぽん

ぽちゅん

トロトロしたのも出てきたし…
ほんと、おっぱい好きだね



うんうん
モミはおっぱいが大好きだもんね

いーっぱい
ムニユムニユしてあげるからね♪

たふっ

たふっ

たふっ

はちゃん

ん

ふふ

はちゃん

たふっ

子供扱いするなって？
ふふ、そんなにおっぱい好きなら
子供みたいなものだよ？

んー？
じゃあ、コレ辞めちゃう？別のにする？

はちゃん



たばん

あはは、素直で偉いね♪
いっぱい気持ちよくなってね…

ばちゅ

たばん

たば

ばちゅん

ばちゅん

ん

ばちゅ

たばん

たば

ん

ばちゅ

たば

ん…いいよ
おっぱいで受け止めてあげるから
好きな時に出して？

ばちゅ

ん





わわわ…

いっぱい出たね
気持ちよかった？

あはは、大好きだね、おっぱい♪
やっぱり赤ちゃんみたい

あ
わあ

あ、今日さ…
アルバイト行く前に
私の教室に寄ってくれない？

えっ、
ガトーシヨコラ作ってみたの
休憩中に食べてもらおうかなって
疲れた時には甘いモノでしょ？

ふっ
キミには申し訳ないって
思ってるけど…でも、お陰様で
最近はお仕事しなくてよくなってるから
だから…少しでもお返しがしたくて

いっくっ。



ってことは：佐々木の中では、俺とのことは仕事じゃないってことなんだろうか。

他の意味があるなら嬉しいんだけど…。

そんな事を考えていると、何かに気づいたように佐々木は顔を真っ赤にして慌てだした。





あ、その、えっと...

ほっ、ほらっ
はやく行かないと誰か来ちゃうよ？

はい、おしまいっ
先に行っちゃうから...っ

それから数日後。

いつものように佐々木に金を渡した
日の放課後。

約束の場所に佐々木が来ない。
連絡を入れてみても返事がないので、
俺は校内を色々と探し回っていた。

教室にもいない。
でもまだ鞆があるから帰ってないはず。





特別棟の奥、
いつもは鍵がかかっている空き教室から
声が聞こえたような気がした。

扉は今日に限って施錠されていない。
俺は隙間からこっそりと覗いてみた。

そこにいたのは、
教師の牧田と佐々木だった。





ハハッ
なんだお前、
もう濡れてるじゃないか

楽しみにしてたんだろ？
俺とのセックスが忘れられないんだろ？

そ、そんなこと無いです
お金のために仕方なく
してただけなのに…

ん



牧田が佐々木の股間に手を伸ばすと、
くちゅつと湿った音が聞こえた。

俺が知らない、佐々木の愛液の音だ。

でも…そうか
佐々木の援助交際相手って
牧田だったのか…。



ほう？じゃあこの
ヌルヌルはなんなんだ？

そ、それは…ん

はははっ
あれだけやりまくれば
身体が覚えちまうよなあ？

まさかお前、
普段から俺を見ただけで
マ●コ濡らしてるんじゃないだろうな？

あ

んっ
そ、そんなわけないでしょ
気持ち悪いです…んっ

もっ
お前とアイツの関係は俺しか知らん
お前さえ戻ってくれば
誰にも言わずにおいてやるぞ？

ん
そんな…！
お、脅すつもりですか！

第一、それなら先生だって騒ぎになりますよ！
生徒と援助交際してたなんて…

それに私と彼はその…
そういう関係じゃありませんから…





ほう？じゃあなんで
あいつから金を受け取って
いたんだ？恋人関係なら
そんなことしないだろう？

そ、それは…

素直になれよ佐々木
それに、あいつが稼げる金額なんて
タカが知れてるだろ

俺のところに戻ってくれば金が入るし
アイツは助かるし、いいことずくめだろう？



で、でも…っ

妹の薬代はどうする？
母親の病院代はどうする？

はあ、

わ、私がアルバイトを
すればそれくらい…

してみても、ダメだったから
俺の誘いに乗ったんだろ？

難しく考えることないだろ？
前に戻るだけなんだから…な？

いや…んんっ…！
や、やめて…ください…っ！

グ
イッ

ヌチ

グ
イッ

はあ、





んあ、先生と違って心から私を心配してくれて…っ

あう、

あ、

ん、びん、ん、ん

でも、そんなアイツより俺のが良いんだろ？まんこがヒクヒクしてイキそうになるのがわかるぞ

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ

そんなこと…ない…っ！やっ、イヤ…っ！

ん、

あ、

ダラダラとマン汁垂れながして何言ってるんだ！ホレ、イけ！いつもみたいに派手に吹いちまえ！







あれ…潮吹きってやつだよな。

俺がいくら頑張っても気持ちよくしてあげられなかった佐々木が、
あんなに感じてる…。

くそっ…悔しい。

けど、ドロドロになつて
感じてる佐々木から目が離せない。

ほら
教えた通りにしゃぶってみろ

うう…でも…

いいのか？
アイツが払う金だけだと
もたないんだろ？
躊躇することないだろ
いつもの通りにすればいいんだからな

うう

アイン

は、はい…



あむっ
ぢゅるっ
じゅるっ

おお…そうだ
お前は舌の使い方が上手いからなあ
歳くった風俗のババアとは違って
現役のフェエラは最高だ

そう…
根本から吸い上げるようにしてしゃぶるんだ
何度も教えただろ？

んぐ

じゅるっ

じゅるっ

涙目になりながら覚えたんだから
しっかりやれ



おはっ...

いい感じだ

じゃあ次はしゃぶりながらオナニーしろ

...え？

そ、そんなこと...

いつもやってることを
組み合わせるだけだろ？

でも...は、恥ずかしいし...

教師と同級生のチンポしゃぶってる
やつに恥ずかしいとかあるのか？

いいからほら、
ヒクヒクしてるマンコを自分で弄れ

は、はい...













ぷは…っ
はあ…はあ…あうう…

も、もういいですよね？
これで満足しましたか？

なに言ってるんだ
こっちはお前がアイツの相手してる間
ずっと溜まってたんだぞ？

は—っ

は—っ

え、で、でも…



.....

はっはっは！
いい景色だなあ
マンコびしょびしょじゃねーか

そ、そんなこと言わなくて良いですから
するならさっさとしてください

はあ♡

でもなあ、嫌がつてる生徒に
無理矢理挿入したんじゃないだろうか？
だからホラ、いつものアレ言ってくれよ

…わ、私のトロトロおま●こは…
先生に売約済みです

だからお気兼ねなく
好きなだけじゅぽじゅぽと
挿入してください…

おーそうかそうか！
なら安心だなくははは！

くっ…う…う…





んあ...あああつ!

ふいー...佐々木のまんこは久しぶりだなあ

はあ...ん。

んっ

すけえうん

ズッ...

ガモの極細チンポとは違う、
大人チンポはどうだ?ん?

ど、どうもこうも...ありません...んんっ!

そう言う割には
きゅっきゅって締め付けてくるぞ？

お前も本当は物足りなかったんだろ？
俺にしてほしかったんだろ？

グググ

んっ

グググ

んっ

グググ

ムム

んっ

あっ

んっ

んっ

違い…ます…っ
そんなことは絶対にない…から…っ

はぁん

グググ







じゃあこのマン汁はなんだよッ！
しっかり感じてるじゃねえか！

ん

やつ、言わないで…あああんっ！

あつ、あああんっ！

だめっ、もう止め…

出ちやう…

出ちやうからあつ！

ばちゅ

ぶっ

あ

ばちゅん

出しちまえ！

教師チンポにマンコじゅぼられて
だらしなく漏らしちまえよ！

あ

らめっ、許して…ッ！
だめえええええっ！

あ
あ

ばちゅ

ばちゅん

あ
ん

ばちゅ

あ





佐々木のあそこが、
潮と精液でドロドロになつてゐる。

牧田はそれを見て満足そうな笑みを
浮かべて、佐々木の身体を抱き寄せた。





うっ...

やだ...もういいでしょ?
もう止めて!

はあ、
はあ、

無理するなってお前が一番好きなのはこっちだろ?

こ、これ以上すると警察に通報しますよ?

好きにしろ
俺もお前の動画を公開して道ずれにしてやる



でもお前のケツ穴は
物欲しそうにヒクヒクしてるぞ？

やっ...やめて！ 本当に嫌です！

それに嬉しいだろ？
今までオナニーも
知らなかったお前が
俺に開発してもらった
アナルだ

こうやって
ハメてやらないと
悪いもんなあ

きゅん

キッ

キッ



ズッ

んあ、

あ、

お前の処女奪った時
あれだけ泣いてたのになあ
ケツ穴の時は
そうでもなかったもんな

マン汁ダラダラ流してよ
ハメ潮垂れ流しながら悦んでたじゃねえか

やだ…違う…んんっ
あ、んっ…んんっ…!!

あ、

ズッ

んあ、
んっ

ズッ

ズッ

ズッ

あんまりキツすぎるから拡張しておけって
言ったらよ、学校にいる間にもローター入れて
たよなあ？ やっぱ好きなんだろ？





佐々木が…

あの佐々木がアナルにローター
入れたまま授業を受けてたなんて…。

牧田に言われて仕方なくって
ことなんだろうけど、でも…。

あの感じようを見ると、
本当に感じてるんだなっるのがわかる。









佐々木のものとは思えない
喘ぎ声が響く。

よだれをダラダラと垂れ流しながら、
あの佐々木がよがっている。





ふいー！良かったぞ、佐々木
今回の分だ、もってけ
また声かけるからな

あ...あ...

ホイッ

ドサッ

ビーン

ビーン

ッポッ

ん、

はー

はー

はー

はー

ポタ

ポタ



最後に牧田は金を置いて、
教室から出て行った。
どうしようか迷ったが、
俺は佐々木に声をかけた。





君か…
もしかして、見てた？

ううん、いいの
こんなところでしてるのが
悪いんだし…

それより、それ……
私と先生のエッチ見て
おっきくなっちゃったの？

全身を牧田の精液で
ドロドロにした佐々木が訪ねてくる。
悔しいはずなのに、悲しいはずなのに、
確かに俺はガチガチに勃起していた。



…してあげたいけど、今の私は嫌でしょ？
その…汚れちゃってるし

…どんな私でも好き？
そっか…ありがとね…
じゃあ…今の私でもいい？

ガッ



私とえっち…しよ？
…今はお金持ってないからダメって？

ううん、いいの
今の私はきれいじゃないから
お金もらう価値ないし

それに…ほら
もうこんなにおつきくなってる
このまま帰るの、つらいでしょ？

じ…

私も…このまま帰りたくないし

ノロッ…

とろんとした目が誘ってくる。

でも…今の佐々木は普通じゃない。

この女の子が佐々木だということが、俺にはイマイチ信じられなかった。

クラスじゃいつも隅っこで大人しくしてて、可愛いのに自己主張が無くて……それなのに。

色んな感情が胸の中でぐちゃぐちゃになる。

佐々木の誘いに、俺は全く動けないままだった。



興奮：したんだよね？
私が牧田先生にいいようにされるの見て
おち●ち●おつきくしちやってたんだよね？

じゃあ、それも私のせいだから…
せめて、気持ちよくなつて欲しいの

ごめんなさい…
モミの気持ち、わかってるつもりなんだけど…

私の膣中、

モミの精液で上書きしてほしいな…

ぽん



その一言で何かが弾け、

俺はガチガチになったチ●コを
取り出して、強引に佐々木に挿入した。



んんっ...!!
ああんっ!!

やつ、んんっ...!!
おつきい...んああっ、んんっ!!

んんっ!!

はあ...



今までより奥に、
上下左右おかまいなしに
佐々木の膣内を突き、こすっていく。

痛いんじゃないかとか
嫌なんじゃないかとか、そんなことを
考えてる余裕はもうなかった。

繋がった場所からふしゅふしゅと
佐々木の蜜が飛んでいく。



激しっ…!!
んんっ、やつ、ああんっ!

うん…っ!
気持ち良いよ…っ
今すっごく気持ち良い…っ!

乱暴にされるほうが好きって?
そんな…んっ、わ、わかんないよ…っ!

モミと牧田先生しか
経験ないんだから…ああんっ!

せ、先生との時は毎回あんなに…っ
感じてたのかって…？

ど、どうしたの急に…？
ちよっと怖いかも…んっ、あああっ！

っ…そ、そういうわけじゃなくて…んんっ！
先生はその…たぶんいっぱい
こういうことしてるからっ…ああっ！

…んんっ！だめっ、今動いちゃ…っ！
お話できないから…ああんっ！



お尻は…んっ！
…脅されてたし、先生はその…んんっ！

あっ

ズ
チュッ

ズ
チュッ

い、色んな女の子にああやって
お尻にするエッチを教えてみたいだから
…あっ、んくっ…！

き、モミにダメって言ったのは…
感じすぎちゃうから…っ！

あんなどころ、見られるの
恥ずかしかったから…んっ！

んっ

ほあ

あ

んっ

ズ
チュッ

ズ
チュッ

ズ
チュッ

ズ
チュッ

怒らないでっ…ごめんなさい…っ！
あ、んああっ！ごっごめんなさい…っ！







はあ...はあ...ん...っ
気持ちよかった...？

ムロリ！

こっぴどい♡
グハッ

はあ、

はあ、

んっ

あはは、そっか...

はあ、

はあ、



色々な汁で顔をドロドロにした
佐々木がつこりと微笑む。

汗だか涙だか精液だか鼻水だかも、
わからないものにまみれていても、
笑う佐々木は綺麗だった。



…ねえ、今もお尻でいたい？

いいよ
モミが今も私に興味があるなら…

してもいいよ…

んっ…

はぁ
はぁ

くこ。

はぁ
はぁ



んっ…はい
キミが大好きなお尻だよ？

すっぴん

くっ

すっぴん
はい

まん丸い自分のお尻を、
佐々木がぐいっと広げる。

きゅつと萎んだ肛門が小刻みに
ヒクヒク動いて、
とろりと液体が溢れてた。





んっ…

こっちにも先生の精液が入ってる…
ごめんね、先に全部出しちゃうから…

んっ…くち…っ！

あ…んんっ…！

ん…んん…っ
こ、これで大丈夫かな？
もう少しお掃除しておく？

ぽっ

ぷりゅっ

…いいよ
私のお尻に入れて…？

手に力を入れて、
佐々木はお尻を広げていく。

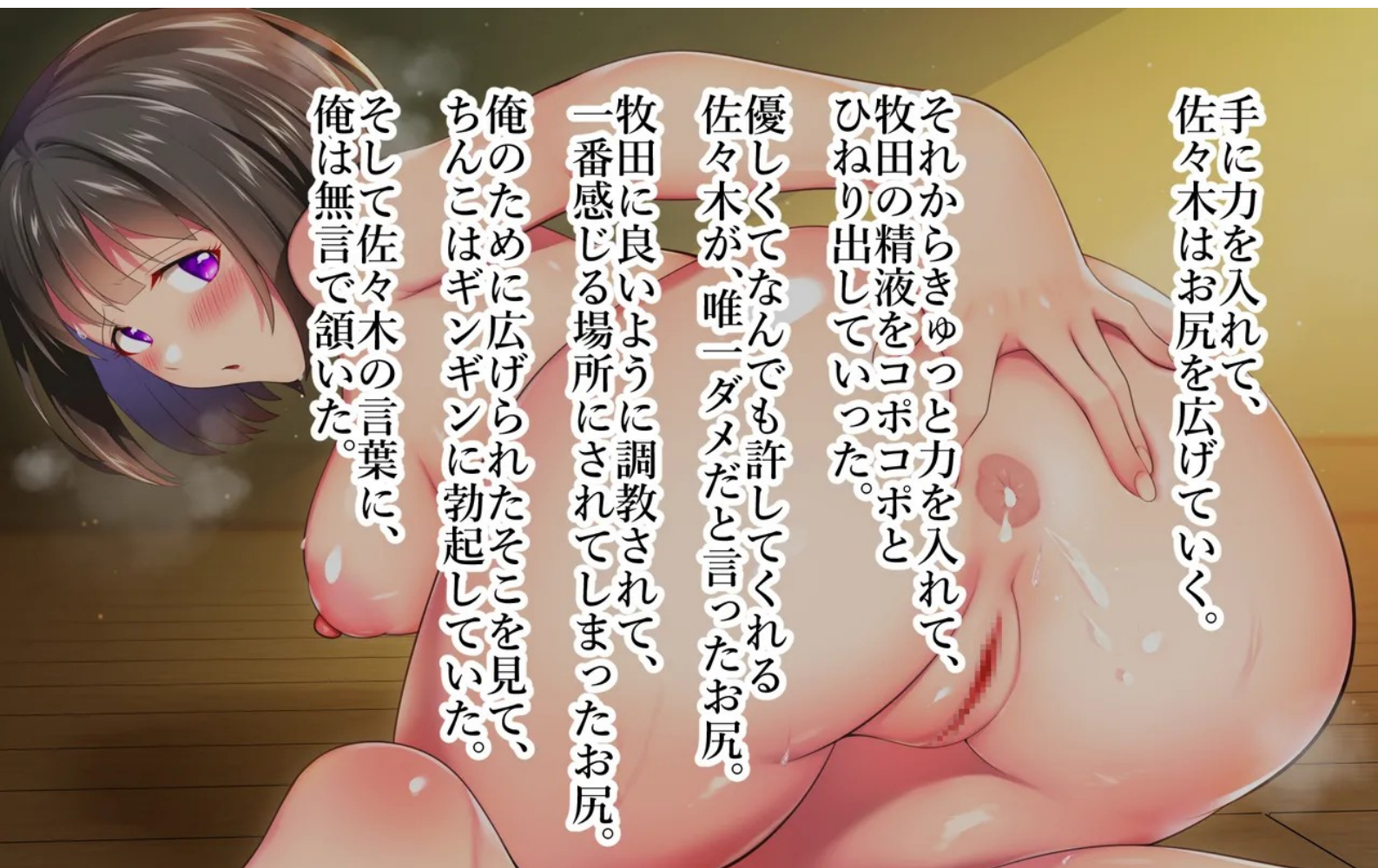
それからきゅつと力を入れて、
牧田の精液をコポコポと
ひねり出していった。

優しくてなんでも許してくれる
佐々木が、唯一ダメだと言ったお尻。

牧田に良いように調教されて、
一番感じる場所にされてしまったお尻。

俺のために広げられたそこを見て、
ちんこはギンギンに勃起していた。

そして佐々木の言葉に、
俺は無言で頷いた。





んつく…んっ、んん…！

×1×11ッ

×112ッ

はあ…はあ…
おっきい、ね…んっ…ああっ…

…私、こっちの方が感じるようになっ
ちやっただみたい…んっ…

入れてもらっただけで
すっごく気持ち良い…っ！

ん…

龟头がゆっくりと
肛門に呑み込まれていく。

最初の抵抗がきつかったけど、
クポッと先っぽが入ってしまった。
からはスムーズだった。

壁がヒクヒクと絡みつき、
俺のちんこを締め上げていく。





どう？
キミが大好きなお尻だよ…
んっ…気持ち良い？

ヌチュン

ヌチュン

ふふ…

もう普通のエッチでできなくなりそう？

あ、

ん、

ん、

ん、



あゝ

ヌチヌツ

はげし

ん

グ
チ
ツ

ヌチヌツ

グ
チ
ツ

あ

先生の精液…っ
ぜんぶ掻き出してね
…あっ、んん！あぁっ！

えっ…
先生とどっちが気持ちいいって？
なんでそんなこと聞くの…っ？…んんっ！

あ

ん

グ
チ
ツ

ピタッ

…っ
う、動いてくれないの…？

え…そんなあ…
私がお尻で感じるのわかってるくせに…

…き、モミのほうが気持ち良いよ…？

お…おじさんのくたびれた
おちんちんじゃなくて、硬くて太くて…
モミに入れてもらったほうが
何倍も気持ち良い…

アソコもいっぱい濡れちゃうし
たぶん帰ったら思い出して…
何回もオナニーちゃうくらい気持ち良い…よう？

もっ

もじ…

うず

うず

はあ

はあ

はあ

はあ…

こ、これでいいかな？

クワッ



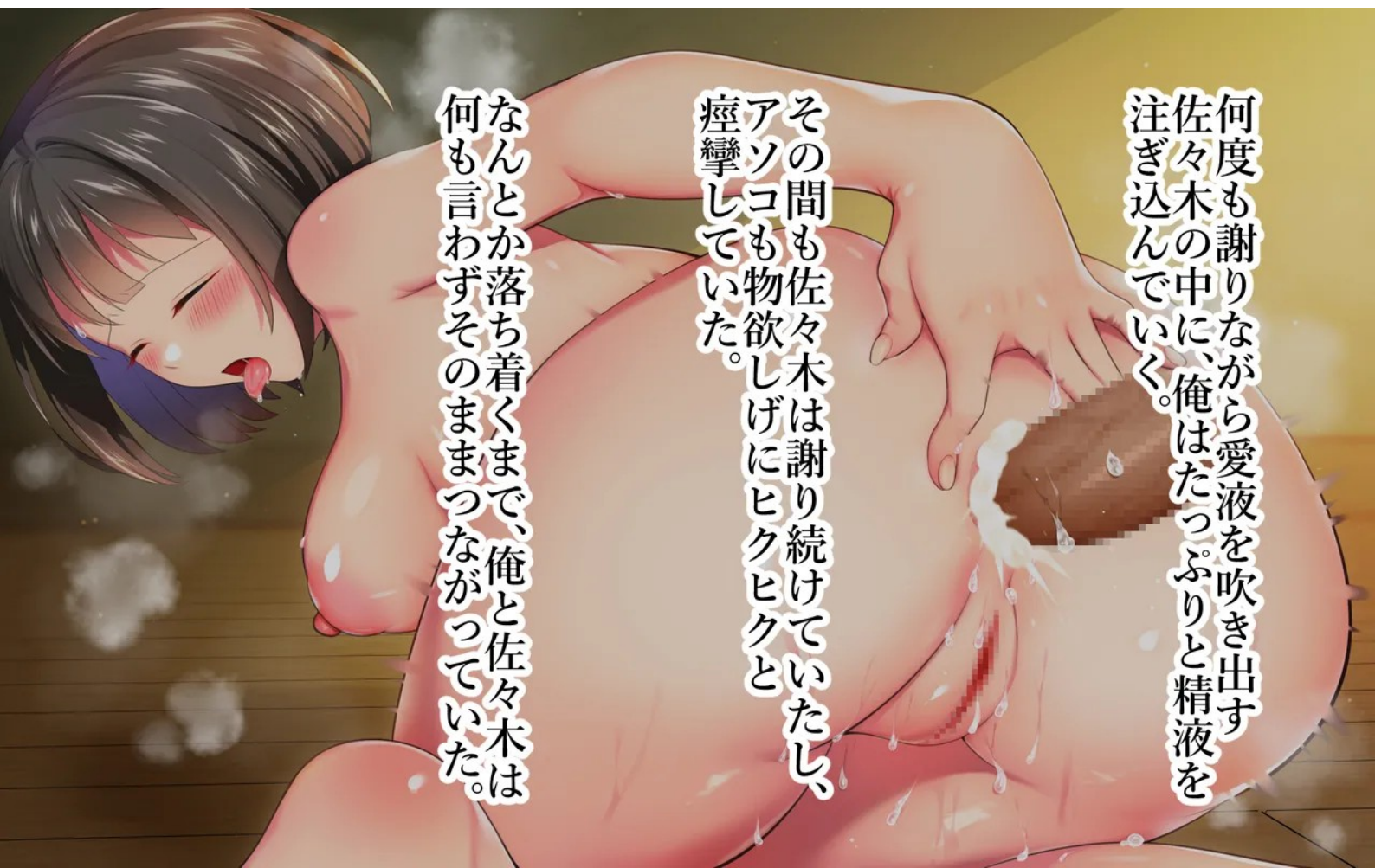




何度も謝りながら愛液を吹き出す
佐々木の中に、俺はたっぷりと精液を
注ぎ込んでいく。

その間も佐々木は謝り続けていたし、
アソコも物欲しげにヒクヒクと
痙攣していた。

なんとか落ち着くまで、俺と佐々木は
何も言わずそのままつながっていた。





ん…

…そろそろ、掃除しないとだね

っぽ…

誰か来ちやうかもだし
見つけたら大変

手伝ってくれる？

はぁ…
はぁ…

それか二人で掃除をして、
できるだけ痕跡を消してから
空き教室を出た。

垂れ落ちた愛液や精液、
汗や佐々木の尿を片付けるときに
思ったことがある。

『きつとこの中には、
牧田の精液もあるんだろうな』

佐々木もきつと思つてたと思うけど、
俺たちは何も言わず黙々と片付けた。



佐々木と二人で校門を出る。

ほとんどの生徒が下校済みで、
通学路には誰もいない。

遅くまで練習してる運動部の
掛け声が遠くから聞こえるだけだ。

俺と佐々木は並んで歩いてるけど、
教室を出てから会話は無し。

何を言えばいいのかわからないし、
何を言っても間違ってる気がするし。

でも、しばらく歩いて互いの
分かれ道にさしかかったところで――

不意に、佐々木の小さい手が
俺の手に触れた。





…明日もバイト？

…そっか…無理、しないでね

ぎゅっ

思えば、佐々木と手を繋いだのは
これが初めてだな。

そんなことを考えながら、
分かれ道まで二人で歩いた。





終

放課後 ¥ 助交際

-SEX AFTER SCHOOL-

◎おまけSS『そのごのふたり』

「お邪魔します」

あれから数週間後。

休日のアルバイトを終えた俺は、
電車で30分かけて佐々木の家に来て来た。

働いた後だし汗臭くないか気になったけど…正直、
それより早く佐々木に会いたいって気持ちの方が強い。

「お疲れさま。今日も大変だった？」

お茶を用意してもらって、ふうと一息。

「まあー。急に休んだ人がいたから、
その分が大変だったかも」

「そうなんだ…無理しちゃダメだよ？
テストも近いんだから」

「バイトはもう慣れたし、勉強は佐々木がみてくれるから
大丈夫だろ。それより、これ」

俺は鞆から封筒を取り出し、佐々木に差し出す。
これは先月稼いだ分の給料だ。

あの日手をつないで帰った日から、
俺は相変わらずアルバイトを続けている。
そんで稼いだ金は全部佐々木に渡して、
家のために使ってもらってる。

バイトの掛け持ちにもすっかり慣れたし、
何より定期的に佐々木と会えるのが嬉しい。

でも、差し出した封筒は俺の手から離れない。

「…佐々木？」

「あのね…お金、もういいの。ありがたいしといっても感謝してるけど、もう本当に大丈夫だから」

「またその話か？俺が好きでやってることなんだから気にしなくていいのに」

「違うの、そうじゃなくてね、えっと…」

言って、身体の前でもじもじと両手を絡ませる佐々木。

「お母さん、再婚が決まったの。相手の人はお医者さんだし、お金はもう心配しなくていいから」

「えっ…？でもお前、それって——」

頭の中に悪い考えがめぐる。

お母さんは何度か見たことがあるけど、佐々木と似て美人だ。

牧田の一件もあったし、脅迫でもされてるんじゃないかと不安になってしまふ。

「キミが心配するのもわかるけど、本当に大丈夫だよ。お母さんが通ってる病院に転勤してきた人で、一目惚れしちゃったんだって」

眉を寄せて考え込む俺を見て、佐々木が微笑む。

「私も会って話したことあるけど、誠実で真面目な人。キミが考えてるようなことは無いと思うから」

「そうか…」

「うん。だから、お金は本当に大丈夫。なんて言っただけじゃないけど…今まで本当にありがとね」

「……」

佐々木の家庭環境が安定したのは嬉しい。
これでお金に困ることもないだろうし、
牧田みたいなやつに目をつけられることもないだろう。

でも…それは同時に、俺が佐々木と会う口実が
なくなるってことでもあるんだよね。

「…？　どうかしたの？」

「…いや、なんでもない」

もう佐々木が苦勞しなくていいんだから、
いいじゃないか。
この上俺が何か言うのは余計というか、
ものすごくかつこ悪い。

「じゃあ、今日はそれを俺に教えるために呼んだのか？」

「あ…うん。そういう意味もあるかな」

「ならメールでもよかつたのに。まあ佐々木らしいけどさ」

「えっとね…でも、それだけじゃなくて…」

「ん？」

佐々木の頬が赤く染まる。

「あのね…もう私のためにアルバイトは
してくれなくていいの。時間もお金も、
もっと自分のために使ってほしい」

「ああ…うん」

「えっと、それとね…」

「ん？」

「こ、これからも…こうやって会ってくれると嬉しいなって。一緒に帰ったり、お休みの日はどこかに出かけたり…」
そ、そういうこと出来たら嬉しいなって思っで…」

テーブルの上で視線を泳がせたまま、佐々木は言い辛そうに
「つまり、その…できれば、彼女としてキミと一緒にいられたら嬉しいなって。お金とかそういうのは、関係なく」

「佐々木…」

「今までのことは無かったことにならないけど…先生とのことも、起きなかったことにはできないけど…それでも、こんな私でよかったら」

上目遣いの佐々木と目が合う。
少し眠そうな、どこか達観してるような瞳。
でも今は、なんだか少しだけ必死な感じがする。
それがおかしい。

「…あつ、笑ってない？
今は真面目な話をしてるんだよ？」

「わ、悪い。佐々木っていつもぼんやりしてる印象だから、なんかおかしくて」

「ぼんやり…？うそ、そんなことないと思うけどなあ…」

ぷくつと頬をふくらませる。
こんな表情は初めて見た。

クラスの間中は絶対に見たことがない、佐々木の表情だ。

「ありがとう、嬉しい。」

俺も佐々木が彼女になつてくれたら幸せだなっと思う」

「…ほんと？こんな私でも嫌じゃない？」

「もちろん。でも、牧田のことはどうにかしないとな。俺と佐々木付き合い始めたのを知ったら、またちよっかいをかけてくるかもしれないし」

「あ、それなら大丈夫だと思う。先生、逮捕されるみたいなの」

「…え？」

「他の女子とか、他校の女子にもお金渡してエッチなことしてたんだって。それがばれたって…警察から連絡が来たの。私も被害者の一人だから、話を聞かせてほしいって」

「そうだったのか…」

「うん、だから…大丈夫だと思うよ？」

「うん…確かにそうだな」

頭の中にずっとあった、最後の懸念が一気に無くなった。俺だって、ちゃんと佐々木と付き合えたらって考えてたから。でも、そっか…佐々木が俺の彼女か。

そう考えるだけで頭がふやけそうというか、にやけてきてしまう。

「…なんだか、ニヤニヤしてない？」

「そ、そうかな？」

「うん。だらしない顔してる」

「いやあ…佐々木が彼女かあって思ったら…つい」

佐々木が、はっと息を飲む。

「…この？」

「もちろん。俺のほうからお願いしたいくらい」

「そっか…ふふ、うん。ありがとう」

「あ、じゃあお母さんに挨拶しないと。
ちようどお邪魔してるんだし」

「お母さんはいま、妹と一緒に病院なの。」

その後、新しいお父さんとごはん食べてくるって。
私も誘われたけど…用事があるって断っちゃった」

「新しい家族との食事じゃないか。なんで断ったんだ？」

「だって、キミが来てくれるし…それに、
恋人になつての初めては自分のお部屋がいいなって
思ったから」

「恋人になつて初めてって…どゆこと？」

ぽかんと口を開ける俺の手に佐々木の手が重なる。

「…彼女になつてする、初めてのエッチってこと」



佐々木の部屋、佐々木のベッド。
女の子らしい小物が控えめに並んでるあたり、
佐々木っぽいなと思う。
それに、俺の部屋じゃ絶対にしない甘い匂いも。
なんていうか、ものすごく『女の子の部屋』って感じた。

「……」

「あ、ちよつと。どうしてチェストをじつと見てるの？
顔がやらしいんだけど」

「や、ここに佐々木の下着が入ってるのかーと思って」

「入ってるけど…開けたらしばらく口きかないよ？」

ジト目で見られてしまった。

「男子からしてみれば女子の部屋は聖域で、
引き出しの中は神域なんだよ！」

「そんなところに来てまで下着を漁ろうとする人は
いないと思うけど…」

はあ、と小さくため息をついて、
佐々木がベッドに腰かける。

「えっと…なんか恥ずかしいね。今までエッチなことは
いっぱいしてきたはずなのに」

「うん…俺も気持ちが違う感じ。気合入るっというか」

「…お母さんたちが帰ってくるまでに終わるかな？」

「さ、さすがにそれまでには！」

「ん。わかった。じゃあ…」

そう言っで、佐々木が制服に指をかける。

「……」

「な、なに？ そんなに見られると恥ずかしいよ」

「いや、きれいだなーって思った」

「そうかな…自分でや思ったことないけど」

「きれいだし、それにエロい」

「…それは誉め言葉なのかな？」

「もちろん。脱ぐと思ったよりぶにっとしてで触り心地がいいってどうか」

「ふ、太ってるってこと？ わあ…シヨックかも…
そういえばキミ、私のお腹触るの好きだもんね…
そっかあ」

死んだような表情で目を逸らされてしまった。



「ち、違うってー！佐々木は全然太ってないよ。なんていうか、手触りがいいっていうか」

「そんな生地みたいな…」

「それに俺、そんなにお腹さわってる？」

「うん。胸触る前に太体まずはお腹触ってる。気づいてなかったの？」

「気づいてなかったな…」

自分にそんな趣味があるとは思わなかった…。確かに佐々木のお腹はプニプニしてて気持ち良いけど。

「とにかく、佐々木は太ってないよ。すごくきれいな身体してると思う」

「そ、そっか…なら良いんだけど…」



佐々木がベッドの上でもどどと小さく体をよじる。
そのたびにプルプルと胸が揺れて、
思わず目で追ってしまふ。

「今日はベッドだから…
いつもよりゆっくりできると思うの。
だから…なにかしてほしいこと、あつたら教えて？」

「え…いいの？なんでも？」

「そんなキラキラした目で言われると戸惑うけど…
うん、いいよ？」



「...これでいいの？」

「うん、最高」

寝ころんだ俺に添い寝するように、佐々木が横たわる。
左手でチンコをズボンの上からさすりつつ、
ぼるんと出したおっぱいを俺の顔にのせながら。

「これ、ベッドに寝ころびながらじゃないと
難しいと思って」

「まあそうだけど...なんかおかしくない？」

「なにが？」

「だ、だってこれ...
赤ちゃんにおっぱいあげてるみたいじゃない？」

「そうそう。そのまま手でしてほしいなって。
至福のひと時」

「至福じゃないよ、まったくもう...」



Love!
おっぱい越しに見上げる佐々木が、呆れた顔でため息をつく。でもこればかりは譲れない。

彼女のおっぱいに顔をうずめながら手コキしてもらえるなんて、すべての男子の夢だろ！

「じゃ、するよ？」

そう言った直後、佐々木の手がゆっくりと俺のチンコを撫ではじめた。ズボン越しに伝わる優しく、繊細な力加減がこそばゆい。

「あ…おつきくなってきたね。」

まだ直接触ってないのに興奮してきちゃったの？」

「触り方がエロくて…」

「ふふ、自分でこれしてほしいって言ったのに、言い訳しちゃダメでしょ？」

佐々木の指がチンコの根本からゆっくりと亀頭にむかって撫で上げ、カリ首をひっかけるようにして刺激する。

それから手の平で裏筋をくすぐり、最後は亀頭をぎゅっと包み込んだ。

「ほら、もうこんなにおつきくなってる。私のおっぱい、そんなに興奮するの？」

「うん…佐々木のおっぱい…好き…」

「ふふ、正直に言えてエライね？」

カチャカチャと音が聞こえ、ベルトが外されているのがわかる。その直後、少しひんやりとした感触がパンツの中に入ってきた。

「わ…すごい、もうガチガチだね…。我慢汁でベトベトだよ？」

パンツの中に侵入してきた指先が、我慢汁を絡ませて龟头を撫でる。にゆるにゆるぐちゅぐちゅと水っぽい音が聞こえてきた。

「ふふ、ほら聞こえる？ キミの我慢汁、こんなに出てる。指にいっぱいついちゃってるよ？」

くちゅくちゅ、にちゅにちゅ。

まるで遊んでるみたいな無邪気さで、佐々木が俺のチンコを弄んでいく。

「さ、佐々木…。先っぽだけだとちよっと刺激が強すぎるっていうか…」

「あれ、私に意見するの？ さっき太ってるって言われてシヨックだったなあ」

「いや、だからあれは」

「いいから。ほらキミが大好きなおっぱいだよ？」

むにゅ、と顔面におっぱいが押し当てられる。

温かくて柔らかくて、それでいてぷにゅっとした弾力がある。

ちよっと息苦しいけど、これなら窒息してもいいって思えるなあ…。

それに—

「あ…ちよっと、乳首吸っちゃ…んっ、ああっ…！」

コリっとした乳首がちょうど口のあたりに来て、思わずしゃぶりつく。

乳房のふわふわプニプニした感触と、コリコリした乳首の触感が興奮する。

「んあっ…んん…もう、おちんちんこんなにしながら
おっぱいに吸い付いて…んんっ!」

甘い声をもらしつつも、佐々木は
ツボを押さえた手コキを続けていく。
手のひらまで我慢汁でドロドロにして、
下品な音を立てながらの手コキ。
カリ首も裏筋も鈴口も全部まとめしごきあげていく。

その快感を十分に感じつつも、
俺はおっぱいや乳首の感触を堪能する。
佐々木の柔らかさ、佐々木のおい、佐々木の弾力。
脳みその中心まで佐々木で満たされるような
感覚が加速していく。

「ふふ…そろそろ出そうかな？
いいよ、おっぱい吸いながらぴゅっぴゅっでしようね」

「う…うう…っ!」

全身の快感がチンコに集約していくような感覚。
腰の方からも重たいものがこみあげてきて、
それが一気に爆発する。

びゅるっ!びゅるるっ!びゅくっ、びゅるるるっ!

「わあ…ふふ、いっぱい出たね。ほら見て?
手までドロドロになっちゃった」

そう言いながらも、佐々木はチンコから手を離さない。
ゆっくりと、精液を一滴残らず絞りだすように
チンコを絞り上げていく。

「う…うう…」

「もー、ぴゅっぴゅっでもおっぱいは吸いたいのか?
甘えん坊だね」

ぜえぜえと荒く息を吸う俺に、
佐々木が優しく微笑みかける。
それから、射精直後で敏感になっているチンコを
そっと撫で上げた。

「どうだった？おっぱい吸いながらシヨシヨされるの」

「う、うん：最高だった」

「キミ、おっぱいもお尻も大好きだもんねえ…」

しみじみと言われてしまった。

「そう言われると恥ずかしいな…」

「どうして？私は嬉しいけど」

「そうなの？」

「だって、好きな人が私の身体を好きって
言ってくれてるんだもん。嬉しいよ？」

「でもさ、身体目的みたいに思われたら嫌じゃん」

「大丈夫、信じてるから」

俺の腹に飛び散った精液をふき取りながら、
佐々木がそんなことを言う。

そっか。俺を信じてくれてるのか。
俺たちの関係、始まりは歪なものだったけど…。
今が良い関係なら、それでも幸せだ。

「他の子のおっぱいとかお尻が好きって言い出したら、
ねじり切るけどね」

「何を？何をどうやってねじ切るの？？」

「場所想像に任せるけど…とにかく、頑張つてねじ切るからね？」

佐々木は可愛いポーズをとりつつ、怖いことを言う。

「グッ、つて可愛くポーズとっても怖いから」

「あ、コレ可愛いんだ。こういうの好きなんだ」

「…わ、悪いかよ」

「別にー。ただ…」

ジトつとした目で見られる。

「な、なに？」

「んーん。チョロいなーって思つて。こんなのすぐにできちゃうよ？」

「なら毎日してほしい」

「だめ。ありがたみがなくなるでしょ？」

「えー！」

「これはね、特別なお願いをするときにだけ出てくるモードにします」

「特別なお願いってなに？」

なんだろう…プレゼントが欲しいとか？千葉県にあるのに東京なんとかって名前がついてる遊園地に連れて行ってほしいとか？バイト、まだ辞めるわけにはいかないな。

「えっと…今日はずっと一緒にいてほしい、とか。そういうお願い」

「……」

「あの…何か言っただけいいんだけど」

「いや、思ったのと違っただけー可愛いこと言い出したからびっくりした」

「あー…だからか…」

佐々木の視線が少し下がる。

そこには、射精した直後だつてのにすっかり元気になっている俺のチンコが。

「なに？」コは私を可愛いーって思っただらおつきくなるの？そういうルールなの？」

「…まあ、その認識で間違いないかも」

言い逃れできない状況だし。

「ええ…じゃあこれからデートの時とか、あんまりおしゃべりしないほうがいいかな」

「やつ、それはぜひしてくださいお願いします！」

おしゃべりした佐々木…見たい！

むしろ俺以外には見せたくないまである。

「でもさ、デート中ずっとこうなってるんでしょ？それは困るなあ」

フル勃起したチンコをツンツンしながら、

佐々木が頬杖をつく。

その表情はどこか楽しげだ。

「そこは頑張る。頑張って大人しくしてるから」

「でもさ、私の気持ちになっでみて？」

映画を見ててもお買い物をしてても、
「おちんちんがおつきくなってる人と一緒にいる女子」
になっちゃうんだよ？」

お母さんに何て言ったらいいかな？」

「それはちよつといたたまれないかも」

「でしょ？アレに似てるよね、ハリネズミのジレンマ」

「そうか？」

「うん。仲良くしたいけどお互いにトゲで傷つけちゃう…
と、恋人のために可愛くしたいけど
おちんちんおつきくさせちゃう…って、似てない？」

「似てなら」

「ま、でもとりあえず。今日はお母さんたちが
帰ってくるまでに大人しくなってもらわないとね」

そう言つて佐々木がホックを外すと、
スカートがぱさりと床に落ちた。

「あ、ごめん脱がない方がよかつた？
制服エッチの方が好き？」

「別にそんな趣味はねーけど…って言うか、
なんかそれ変態チックじゃない？」

「いやぁ、キミってそういうところだわるのかと思つて」
「偏見だろ…それよりお前はどんなんだよ？
こだわりとか無いの？」

「んー。大好きな恋人とできれば何でもいいかな？」
にっこり笑いつつその解答は、正直卑怯だと思う。

制服を脱ぎ捨て、下着姿になった佐々木がベッドで俺を見上げる。パンツの一部がしつとりと湿って色が変わってるのがわかる。

『佐々木…すごい濡れてるな』

『…どうしてそういうこと言うのかな。スルーしてくれるのがマナーじゃない？』

くいつとシーツを寄せて、ちよつと恥ずかしそうなのが可愛い。

『思わず感動して…俺つて下手だから、あんまり佐々木を気持ちよくしてあげられなかったから』

『下手とか上手とかじゃないよ…だって、気持ちが違うもん』

『気持ち？』

こくりと頷く。



「うん。キミと、その…したいなって思ってるから。他の余計な理由ばっかじゃなく、ただキミとしたいなって思ってるから…だと思っよう?」

「……そっか」

なんだこの気持ちは。じわーっと、心の奥から温かいものが湧いてくる感じ。そう、例えば――

「トロットロって感じ」

「…だーかーらー」

唇を尖らせてむすっとした佐々木に謝りつつ、ちんこの先を割れ目にあてがう。にゆるりとした感覚と温かさが全身を駆け巡る。

「じゃあ、入れるぞ?」

「うん…来て」

腰をぐいっと押し出すと、あっけないくらいスムーズに佐々木の中に埋まっていた。迎え入れてくれるように、抱きしめてくれるみたいに。

でも俺に余裕なんて全然なくて、ぬめぬめと締め付けてくる感触に爆発寸前って感じだ。

「んんっ…この体勢って…んんっ…すっごく、深くまで感じるんだね…んんっ…」

正常位…これ、佐々木の顔が見れて嬉しいな。佐々木が俺の首に腕を回し、ぎゅっとしがみついている。おっぱいが当たるむにゅっとした感触と、熱く漏れる吐息が耳に近い。

「ゆっくり、いっぱい、深く…キミを感じられる…」

しがみついてくつついた佐々木の頬が熱い。
見なくてもわかる。これは顔が真っ赤になってるやつだ。
それから、俺はゆっくりと腰を動かしてはじめた。

「んっ……ああ……っ！おっきい……っ！
んっ……ああ……ああ……っ！」

「大丈夫か？痛いとか苦しいとか、ないか？」

「だいい、どよぶ……んっ……奥の方で……
きゅんっ……してる……ああんっ！」

ぐちゅっ、ぬちゅっ。

生々しい水音をたてながら、
佐々木の中をチンコでこすりあげていく。

「はあ……んっ、ああっ……！だめっ……上のほうこすちや……
やつ、んんっ……！」

甘えたような声が嬉しくて、ダメって言われた場所を
集中的に攻める。

「んああっ……んんっ……これじゃっ、
私だけ気持ちよくなっちゃうから……ああんっ！
はあ……はあ……どう、かな？気持ちよくなってる……？」

「うん……すげえ気持ちいい。温かくてヌルヌルしてて、
ずっとうしてたい……」

「あは……あそこ、ふやけちゃうよ？」

につこりと笑い、俺の頭をなでる佐々木。
それに甘えるようにして、
何度も何度もピストンを繰り返す。

俺と佐々木がつながったところが、
二人の体液でどんどん汚れていく。

「俺っ…っ！佐々木のことっ！ずっと好きで…っ！」

「うん…んっ…んあぁ…っ！」

「声かけなかったけど勇気が出なくて…っ！
でも気になっで…っ！」

「そう、なんだね…あぁん…んん…んぐっ…あぁ…っ！」

「だから…卑怯だっでわかってたけど…
佐々木にバイト代を渡せるが嬉しくて…っ！」

「うん、うん…ありが…あぁはあっ！」

ようやく、彼女としての佐々木とつながれた。
そのことが嬉しくて感動的で、頭の中が真っ白に
なりながらも言葉が溢れてくる。
佐々木はそんな俺の頭を撫でながら相槌をうってくれる。

「本当はダメだっでわかってても…っ！
エロいことさせてくれるのを拒否できなくて…っ！」

「仕方、ないよ…んっ…あれは私から言っただことだし
…や、ん…っ！」

「でも…それでも…っ！好きなのに！佐々木のことっ！」

「あっ、んん！やっ、耳元でそんなこと…んあぁあっ！」

「俺、もっと頑張るから！」

佐々木のこと離さなくていいように、ずっと大好きな
佐々木と一緒にいられるように頑張るから！」

「ダメっ…ダメえっ！あっ、あんまりそういうこと
言われると…嬉しくなっちゃうから…んっ、あぁっ！」

「佐々木…好きだ！ずっと大事にする！」

「だめって、言ってるのにい…あっ、ああああっ—」

甘い嬌声が響いた直後、
佐々木のおそこが俺をぎゅううっと締め上げた。

「—うぐっ—」

どくんっ！びゆるっ！びゆるるるっ！

「やっ…ああんっ！

あああああああああああああっ—」

ぷしやあああああああっ！

俺が射精するのと佐々木が潮を吹くのは、
ほぼ同時だった。

「はあ…はあ…も、もう…ダメって言ったのに…
キミまでびしょびしょになっちゃったじゃん…」

「問題ないだろ。佐々木のならどんな汁でも大歓迎だし」

「えっと、汁って言わないでほしいかな…」

なんて、苦笑を浮かべる佐々木と
しつかり手をつないだまま。

俺たちはしばらく並んで横になっていた。



「えーと、掃除は終わったしシートも洗濯機。これで問題無いよな？」

「うん。これなら大丈夫だと思う」

行為の痕跡をなるべく消した室内を見渡し、俺と佐々木は頷き合う。ゆくゆくはちゃんと佐々木のお母さんにも挨拶したいけど、今はまだ過激な話題を振りまかないほうがいいもんな。

「えっと時間は…あ、お母さんたちが帰ってくるまでもう少しあるかも。お茶でも飲む？」

「ありがとう。もううよ」

カップが三つ並んだテーブルを挟んで、俺と佐々木は向かい合って座る。

まったり、ゆつくりとした時間が流れる。

「…んー」

お茶を一口飲んだ佐々木が、じっとこちらを見る。

「な、なんだよ？」

「前から思ってたけど、キミってさ…」

いつも教室の隅で、頬杖をついていた佐々木。可愛いのに地味で、女子の友達も男子の友達も少ない佐々木。それでも、俺にとっては天使みたいな女の子。

「恋人にこういうこと言うのって、悪いのかもしれないんだけど…」

「…なに？何言おうとしてる??？」

家族思いで、牧田からの脅迫も一人で抱え込んで。
そんな数週間前が想像できないほど、
今の佐々木は良いように俺をイジる。
それが、たまらなく嬉しい。

「キミって、
エッチするときに急にIQ下がる瞬間があるよね」
「うるせーよ！」

だって色々と吹っ切れた佐々木は、
前より感情豊かで、何より可愛いから。

end

